

Title	十九世紀初期に於ける英国都市生活の一面 ( 二 )
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.9 (1921. 9) ,p.1316(104)- 1327(115)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210901-0104">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210901-0104</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 拾九世紀初期に於ける

## 英國都市生活の一面 (二)

奥井復太郎

## 五

大都市殊に大規模の産業組織の社會的中心としての近世都市の急激なる發達は實に産業革命以來起つた社會現象中の重要なものの一つである。そして是等の都市が近代社會の文明を代表する意味に於て近世都市の意義と内容とは十八世紀以前に於ける都市の其等と全く異なるものであり、従つて近代文明の兩面即ち其の利益と弊害、美と醜との兩面は明白に都市生活の中に表はされてゐる。殊に急激な産業の發達に隨從して生れ出た都市は其の建設に於て、或は中

世以降傳つて來た古い都市形體の近代的改造に際して甚しく焦燥と粗笨との跡を示してゐる。是等は近代産業組織の缺陷や社會制度の不備から生ずる弊害と共に最近都市計畫或は都市政策の名稱の下に其の改善を迫られてゐる。此處では前號に示した様に近世都市の發生に際して現はれた都市生活の醜惡なる方面を觀察する。此の目的に添ふ爲に前號に於ては都市の發生膨脹と共に其等の都市に集つた人々が如何なる性質のものであるかを簡単に説明して置いた。それで以下は前にも一寸掲げたフレデリック・エンゲルスの著書『千八百四十四年に於ける英國勞働階級の狀態』に依つて暫く此の社會主義者の眼に映じた所を窺つてみよう。此の書の原名は *Die Lage der arbeitenden Klassen in England* で千八百四十五年の獨逸出版である。然しこゝで筆者が用ひてゐるのは其の英譯 *Condition of the*

*Working Class in England in 1844*。で原著者は之の英譯本に十四五頁の千八百九十二年の序文を載せてゐる。この序文には千八百四十五年から以降四十年に及間の英吉利勞働階級の簡單な歴史を千八百八十五年三月號の *London Commonwealth* から數頁に亘つて再録してある。彼が此の英譯に際して原書に最近の經過をも加へて之れを補足しなかつた理由は此の序文の九頁に擧げられてゐる。その理由の一つに依れば千八百六十五年頃の英國勞働者の狀態に關してはマルクスの「資本論」の第一卷の内に豊富なる描寫を見出す事が出来るのである。(前號に屢々引用したオグの「近代歐羅巴の經濟的發達」の百五十一頁の脚註にもエンゲルスの此の著書とマルクスの「資本論」とか英吉利に於ける新しい産業組織の暗黒なる方面を記述したものととして擧げられてゐる)。然しエンゲルスがその著に於て屢々

工場勞働者の生活が全勞働階級の生活と同一でない事を注意してゐる様に、英吉利の勞働者の生活がその都市生活の全部でないのは勿論都市生活の暗黒なる部面の總體でもない。たゞ都市が近代文明の中心であると云ふ事や、産業的中心となつた都市の人口の大部分を形成してゐるのが「産業革命と共に生れた無産者階級」の勞働者である事からして農業上の勞働者や礦山勞働者などを離れて考へてみると大部分の勞働者の生活は工業都市の生活の一面を語るものとして認める事が出來やう。エンゲルスも近代勞働運動の核心は何と云つても工場勞働者である事を認め更に商工業が大都市に集中せられた結果として都市に於て産業的無産者が非常に大多數を占めてゐる事を述べてゐる。(前掲書 *The Industrial Proletariat* 參照) 従つて英國勞働者の狀態に就て記録せられた所を以上の注意を忘れずに

利用するのは都市生活を描寫する上に於て決して不都合ではないと信するのである。勿論都市以外に以て労働者の生活が更に悲惨なものであつたとしても今は兩者を比較す可き場合でないからして以下の所説が都市と云ふ關係を離れざる以上其れは何等問題とす可き事でないと思ふ。此の點は誤解を恐れるまゝに感じた通りを述べておく。

六

エンゲルスの「千八百四十四年に於ける英國労働階級の狀態」の中 The Great Towns の章はその後にある Factory Hands などの章に對して都市に於ける労働者の生活を一般的に取扱つた點即ち、都市に集つた一般の労働者の生活を觀察してゐる點に於て都市生活を描くのを目的とする筆者に對して誠に都合のいゝものである。従つて今その觀察を追ふて行かう。

エンゲルスは先づロンドン市を取つてかゝる大都市が其の面積に於て、人口に於て、又建物や運輸交通に於て如何に驚く可き偉大なる壯觀を呈して居るかを語つて居る。海からロンドン橋迄溯つて來る間のテームス河の光景は、彼に依れば「英蘭の土地に足を踏み入れる前に人が英吉利の偉大を語る驚く可き光景の中に自己を忘失して了ふ程堂々たり且つ印象の甚大なるものである。」(エンゲルス前掲書二三頁)。併しエンゲルスは此の大都市の偉大なる壯觀が支拂ふた犠牲の如何に夥しいものであるかを説く、即ち此の大都市の住民が彼等の都市を飾る文明のあらゆる奇蹟を生み出す爲めには彼等の人間的性質中の最善の資性を犠牲に供さねばならなかつたのであつた。然も千萬を越ゆる人口の集團から成る都市生活は人と人との關係に於て悲しむ可き結果を來してゐる。「限られた地域の中に

此等の人人が益、大勢集まると云ふ事は人々が各自の私的利害關係にのみ囚はれて、他に對する殘忍なる冷淡な態度や薄情なる離隔と云ふ事が益不快に且つ忌まはしきものとなる。如何によく人々が此の個人的孤立や偏狹な利己心を以つて到る處に於て我々社會の根本的原則であると認めて居るにしても此の大都市の群集中に現はされた程毫も恥づる所なく公々然と認められ且つ自識せられてゐる所は他に有り得ない。人類が各自別個の原則を有する原子と云ふものに分析せられる事換言すれば人類の社會がアトムの集つた世界であると云ふ事は大都市に於て最後の極致までに行はれてゐるのである(同上、二四頁)。

従つて此處では社會爭鬭個人對萬人の爭鬭が公然と宣言せられる。人々は互に相手を自分にとつて利益になる對象となし他の人々を利用す

る事をのみ考る、その結果は斯くして強い者が弱い者を脚下に踏み躪る事となり、權力ある少數者の資本家が彼等の爲に全部を占有するに反して弱者である多數の貧困者には漸く只だ生存と云ふ事丈が残される結果となるのである。(同頁)、エンゲルスはロンドンに就て眞實である事は英吉利の他の大都會例へばマンチェスターやバーミンガムやリーズ市などに就ても等しく事實であつて一方には野蠻な冷淡と頑迷な利己主義とが、他方には名狀す可からざる不幸とがあり又到る處社會爭鬭がある。各人の家は皆恰も敵に包圍せられた状態であり更に到る處法律の保護の下に相互に掠奪する事が行はれて居る然も是等の凡てはそれが何れも明狀に表はされた時には人々をして我々の社會的狀態の結果の前に畏縮せしめ唯だこの全體に痛く損じた布地が尙ほ纏つてゐるのを怪むに至らしめる程恥もな

く公然と認められてゐるのである、と唱へて居る。かくしてエンゲルスは資本主義的社會に於ける社會的受難者である労働者の生活を住衣食の順序に於て英吉利の大都市に亘つて詳細に説明してゐる。然も此の章 (The Great Towns) の大部分は全く労働者の都市に於ける住家の有様を描く事に依つて占められてゐる、我々は大都市に於て住宅問題の叫ばれる事が如何なる源流から發して居るかを明かに認める事が出来る。都市生活の研究の一方に全く此種の住宅問題殊に労働者の群り住む住所に就ての研究が重要な位置を占めるのは其の性質上當然な事である。

七

『何れの大都市にも一個所或は數ヶ所の貧民窟 (shum) があり其處には労働階級が密集して住んで居る。誠に貧困は屢富者の宏壯なる邸宅に近接した、隠れたる裏の路地に住つて居るもので

あるが一般には一個の隔てられた場所が其れに宛行はれて居て、其の場所は富裕なる階級の眼界から遠ざけられ貧困は茲に能ふる限りの苦惱を續けるのである。此等のスラムは英吉利の凡ての大都市に於ては大體類似して造られてゐて何れも其の都市の最も悪い地劃に於ける最悪の家屋からなつてゐる。大抵住居に用ひられる地下室のある平家か二階の小屋が長く列をなして殆ど常に不規則に建てられてゐる。三つ乃至四つの部屋と一個所の臺所とを備へてゐる是等の家屋がロンドンの或部分を除いては大體英吉利を通じて一般労働者の住宅である。且つその街路は概ね敷石のない粗雑な、不潔なものであり野菜や肉類の汚物を以て充され下水道や溝の設備もなく爲めに悪臭のある流れ口のない水溜が所々に出來てゐる、更に空氣の流通はかゝる地域全體に亘つて家屋の建て方の悪いのと亂雑な

のからして全く不可能であり又狭少の地域に大勢の人間が群り住む事に依つて是等の労働者の住區に溢ざる空氣が如何様のものであるかは何人にも容易に想像せらるゝ所である。更にその街路は晴天の日には物乾場となるので家から家へ繩が掛け渡されそれに濡れた着物が懸けられるのである。』(同上二二六頁)

エンゲルスは是等の貧民窟に就て詳細な説明をしてゐる、例へばロンドン市に於ける St. Giles を初めとして各都市即ちダブリン市エヂンバラ市リヴァプール市グラスガウ市や Yorkshire 及び Lancashire に於ける各工業都市に就て労働者の居住してゐる場所の醜惡と彼等の生活の如何に悲惨なるかを述べてゐる。殊にマンチェスター市はエンゲルス自身の生地である丈に充分なる觀察を下してゐる。彼に従へば南ラシカシアと其の中心地たるマンチェスター市と

は英國の製造工業か masterwork をなしとげた classic soil であり又凡ての労働運動が發生した土地である。従て必然に近代の製造工業が労働者に及ぼした影響は此處に於て最も自由にも最も完全に看取せられるし製造工業上の無産者階級は完全なる模範的形體を此處に於て示してゐる蒸汽力や機械や分業の應用が労働階級を陥し込むだ墮落と此の境涯から脱し逃れんとする労働者の努力とは等しく此處に於て最高點に達し十分なる自覺を以つて行はれてゐなければならぬ。(四一—四二頁)

マンチェスター市は純然たる工業都市である Bolton, Preston, Wigan, Bury, Rochdale, Middleton, Heywood, Oldham, Ashton, Salford, Stockport の中心市場であつて従つて多數の商業に従事する人口を有してゐる。エンゲルスはマンチェスター市は奇妙に設計せられてゐて爲め

に數年間其地に住む人も唯自分の事務や散策位をして居る丈では日々の出入に際して労働者の住宅地や労働者にも逢はずに濟ませ得る所であるとして労働者の住宅地域が嚴重に中流階級の爲めに保留される都市の地域から隔離せられてゐるのに憤慨の口吻を漏してゐる。然し事實之れはマンチェスタア市のみに限られる事ではない。工業が活潑に生はれる大都市に於ては都市の美觀は常に美しき地域に住む人々に依つて稱讚せらるゝ事があつても醜惡なる方面は殆ど凡ての人から遮ぎられてゐるのである。都市の美と繁榮を誇らんとする都市計畫が多數の下層階級によつて冷眼視せらるゝ所に都市々民の都市觀念の闕如を非難する者はあるが更にその以外に此の兩者に性質的の相違のある事を認める事を得ないだらうか。ハムモンド氏は都市は一個の生命の保育所であるが同時によりよき生命を

表現する所のものではなくてはならないと説く。然し氏自身も都市に於ける労働者階級の生活を觀察した後には現在の都市組織が到底彼等に都市に對する精神を呼び起す性質のものでない事を認めてゐる。ハムモンド氏の所説は後に於て再び考へて見たい。今はエンゲルスが觀察したマンチェスタア市の中から興味多き所を抄出し見てやう。

## 八

マンチェスタア市には製造工業が發達する以前の市であつた舊市街とも云ふ可き所がある。此の方面に於ける市街の體裁は誠に醜惡と不潔の極である。此處で人々は殆ど露骨に現はれた労働者の街區の中に入り込むが商賣店や酒店などさへも僅の程度の清潔と云ふ事を示さうともしてゐない。が是等はまだその裏にある路地や小路などと比較しては何物でもない、然もこの

見やう。

路地や小路には一緒に二人の人がならんでは通れない様な上の覆はれた小道をぬけて入れる丈である。凡ての計畫的設計を無視して家屋が不規則に詰め合つてゐるのや文句通りに家と家が重り合つてゐる錯雜の様は之れを傳へる事が不可能な程である。然も斯の如きに就て非難せらる可きは決してマンチェスタア市の昔時から残つて來た建物ではなくかゝる混雜は昔の建築方法が残しておゐた諸所の空地が一呎の土地もそれ以上に建てる事が出来ない様に残らなくなる迄に埋られ繋ぎ合せられるに至つて最近その極致に達したのである。』(エンゲルス四八頁)此の最後の言葉はマンチェスタア市の此の方面に於ける醜惡なる外觀が他の人々に依つて舊市街であると云ふ口實の下に辯護せられる事に對する反駁の言葉である。此の方面の悲惨なる生活状態をエンゲルスが感じたまゝ少しく記述して

此の區劃の家屋が如何に無數の不潔と粗末な小道や路地と共に錯雜して居て爲に人をして容易に不快の感情から逃れ出す道を探し出さしめないかを證するには此の土地に生れ此の方面に頻繁に出入したエンゲルス自身さへ新しい鐵道工事に依つて初て見出した様な場所があつたと彼自身が書いてゐる。此の方面の家は小さな平家建で部屋も一室で床を張つてゐる所は殆どなく臺所も居間も寢室も凡て一つの部屋で濟まされてゐる。漸く長さ五呎幅六呎位の茅屋が二個の寢床と云つた様なものと梯子段と煙突とで一杯になつてゐる所もある。又家の内に何物もない所もあつて扉があげ放した儘になつてゐる住んでゐる人はそれに寄り掛てゐる。何處の家でも家の前には屑や廢物が積くなつてゐる。地面に何か敷石があると云ふ事は眼では分らない

で漸く所々で足で觸つて感ずる位なものである。従つて是等はエンゲルスの云ふ如く家畜小屋の如きものである。然し更に驚く可き事は單に此等の労働者の住家が家畜小屋に等しいと云ふ形容を越えて事實豚群が是等の労働者と一緒に飼養せられてゐる事である。エンゲルスは云ふ『住民の清潔と云ふ事に對して更に最も有害なる事柄は澤山の豚の群が何處の路地にも廢物の山積した内を食を漁りながら歩き廻つてたり又は小さな垣の中に圍養せられてゐる事である。マンチェスターの労働者の住んでゐる地割の大部分に於て豚飼ひが裏地を借りては其處に豚小屋を建てる、従つて殆ど凡ての裏の地所の空地には一つ又は數個の圍が見出されその附近の住民は之の中に汚物や殘物を投げ棄てると豚はそれを喰べて太つて行くのである』(五二—三頁)

要するに是等の労働者の住む地帯である *High*

斯の如き地域が英吉利の第二の都會であり世界第一流の製造業市であるマンチェスター市の中心に存在するのである。『誠に其は舊市街である。マンチェスター市の人々は人が地球の上にあける此の地獄の恐怖す可き光景に就て彼等に語る時彼等は常に此の事實を誇張する。然し其が果して何を意味するものであらうか。此處に於て恐怖と慷慨とを生せしむるものは皆近代に於て發生したものであり此の産業時代 *Industrial epoch* に屬する所のものである。舊マンチェスター市に屬する數百の家屋は永くその原の居住者から見放されてゐたが此の産業時代が獨り此の家屋に依つて身を覆ふ所の無数の労働者の群を此等の家屋の中に詰め込んだのであり、又それのみが獨り農業地方や愛蘭から此地に迷はし集めて來た無数の群集に對する屋根を得る爲に是等の古き家屋の間の凡ての空地に残る所なく

河の沿岸は斯の如くして無計畫な錯綜せる家屋の密集でうづめられ其等の家は何れも住む事を得ざると云ふ状態にあるがその内部生活は將に之の不潔なる外觀と相一致する所のものである。然も最も自然に且通常の欲望をすら満足可き適當の機會を有せざる人々が如何にして清潔であり得やうか。『厠竇の數も非常に少ないので日々充溢してゐるか或は非常に遠方にあるので住民の大多數が使用するには甚しく不便である、唧筒や水管は市の美しく整頓せられたる區域のみ見出される事を得るが此處に住む人々の手近には唯だ汚濁に充てるアーク河がある丈では如何にして彼等が其を洗滌の用に供する事を得やうか。よし彼等の住家が彼等と伍して其處此處に散在する豚舎よりも清潔でないとしても其は近代社會の奴隸である彼等の責任として咎めらる可きものでない。』(同五一頁)

建て込むたのであり、此の産業時代が獨り彼等家屋の持主をのみ富裕ならしめる爲めに此等の家畜小屋に等しき家の所有主をして高き價格を以つて人間に賃貸せしめ労働者の貧困を掠奪し數千人の健康を害はんとせしめるものである。實に此の方面に於ける古き建築物は粗惡なものであり何等の利益も其等より求め得る事の出來ないものではあるが然らば土地所有者又は市自治體はその改築に際して何等かの改良を實行したであらうか。否反對に角や奥まつた地所の空いてゐる所があれば直ぐに家屋が造られ餘分の通路があれば直に家が建つてしまふ。斯くて土地の價値は製造業の繁榮と共に騰貴しその騰貴に連れて住む者の健康や愉快に何等交渉する所なく唯出來丈大なる利益にのみ着眼して

“no hole is so bad but that some poor creature must take it who can pay for nothing better.”

と云ふ主義の下に恐ろしい速力を以て家屋の造設が行はれて行つたのである。』(エンゲルス五三―四頁) 全く新たに出来た工業都市でなく、其の以前から多少とも町なり市なりの形體に於て存在を續けて來た都市は製造業の膨脹と共に多くは新舊市街を有してゐる。而して都市の美觀は常に新しき市街に於て稱せらるゝのである。併し新市街に於ても労働者は決して好遇せられては居なかつた。エンゲルスはマンチェスターアの所謂 New Town に於て労働者の住宅地が決して舊市街に比してよりよきものでない事を主張してゐる。(五四頁以下參照) 更に彼は労働者の住居が如何にして建てられるかを説明し新しく建築せられた労働者の家屋は全く外見に於て人目を瞞く猗計に過ぎないと喝破してゐる。即ち「斯の如き小屋は一見皆清らかに且實質的に見える。其の堂々たる煉瓦の壁は人の眼を

瞞く「新築せられた」労働者の街路を通り乍ら裏通りや其の家屋の構造に深く氣を止めずに過ぎるならば英吉利に於ける程労働階級の住宅がよく設備せられて居る所は他に無いとする斷定に於て人々は自由主義派の製造業者の斷定と一致するであらう。』従つて外觀に於て二百年間の持續を表明してゐる労働者の家屋は平均四十年の耐久力を以つて計算せられてゐる。加之に英吉利の土地の賃貸借に關する風習からして他人の土地に建てられた家屋に對しては家屋の所有者が容易に修繕を加へない事を利益としてゐる。(同五七―八頁參照)

家屋の建築法が如何に私利を目的として居るかばエンゲルスが引用して居る Nassau W. Senior の言葉に明白である。即ち「私は或る場所では街が全部一個の溝に沿ふて建られてゐたのを見たら、其れは斯の如くして開墾の費用をかけ

ずに深い地下室を造る事が出来るからでこの地下室は然も貨物や廢物の物置になるのではなくて人間の住家になるのである。』と(エンゲルス六三頁) 且つ斯の如き地下室には往々水が浸入して來るので「河畔にある家の地下室に住む人は毎朝水をその部屋から汲み出して往來に撒き出さなければならなかつた。(同六一頁) Gaskell によればマンチェスターに於て地下室に住む者は約二萬人であるが更に郊外には地下室に住む者が非常に多數であるからしてマンチェスター市を廣い名稱で市外をも含んで計算すれば地下住ひの人の數字は四萬から五萬に達する。(エンゲルス六六頁。)

九

此の外にエンゲルスがロンドンに就て述べてゐる様に都市には一定の住所を有たぬ貧困者が非常に多い。其等を考へてみれば且つその中に

營まれた生活を考へてみれば如何に其が罪惡と不幸と貧窮と恐る可き疾病の發生地であるかを容易に認め得やう。實に是等の住居に對して調査の開始せられたのは、此處に起つた悪疫が社會の中流上流の階級を脅かすに至つたに基くとせられてゐる。エンゲルスの觀察を一つに社會主義者の觀察として看過する事は出来ない。實にかゝる状態は「吾々の如き國にかゝる有様が有り得ると云ふ事に對して吾々は恥ぢなければならぬ」ものであるまいか(エンゲルス二九頁引用 G. Alston, preacher of St. Philip's Bethnal Green, on the condition of his parish)

(未完)